

地域の方・学生・教職員が自由に活用できる持続可能なパブリックスペースを目指して

高田 昌寛¹, 阪上 奈巳¹, 熊部 翔¹, 近森 聡¹

¹ 藍野大学医療保健学部理学療法学科

報告概要

本学学生と地域の福祉事業所は、2022 年度より本学キャンパス内で「就労支援 cafe」を協働運営している。協働運営する中で、感染症拡大に伴う多様な多面的コミュニケーション機会の喪失を補填するために、基本的なコミュニケーションスキルを教示した上で、実践環境を学生らに提供する必要が垣間見えた。学生らは、コミュニケーションの本質を再認知し、その後、地域交流会イベントにて多面的コミュニケーションを経験したことで、内省的变化を具体的に見出し、高い満足度を得た。今後も「就労支援 cafe “3s cafe (さんず・かふえ)”」は、地域および本学の課題解決に向けた取り組みを推進していく。

1. はじめに

「働く」ことは、「一般就労」と「福祉的就労」を包含する。福祉的就労は、一般企業に就労が困難な者を対象とした「働く場の保障」¹⁾と定義され、福祉的就労施設は、障害者福祉関係法等に基づいて設けられる福祉工場を含む各種障害者授産施設と福祉関連法案に基づかない小規模作業所に分類される²⁾。昨今、障がい者の就労支援体制の整備が進み、就労移行・就労継続支援事業所の社会的認知度やサービス利用者が増加し、本領域における医療専門職参画へのニーズが高まっている。

本学では、「福祉的就労の実践の場の減少（地域の課題）」および「医学を学ぶ学生の対外的コミュニケーション機会の喪失（本学の課題）」、これら双方の課題を解決する一手段として、福祉的就労の実践の場をキャンパス内に広げる取り組みを展開している。具体的には、地域連携の促進、多様な対面的コミュニケーションを図る機会を創出することを目的とし、「就労支援 cafe “3s cafe (さんず・かふえ)”」と題し、スチューデントアシスタント制度を適応した中で、2022 年度より、福祉事業所と共に協働運営を開始している。協働運営する中で、初対面の方との接し方、障がいを持たれている方との関係性の構築に関するコミュニケーションスキル（言語的、準言語的および非言語的メッセージ³⁾）の重要性を再認知した上で、感染症拡大に伴うコミュニケーション機会の喪失を補填するための実践環境を学生に提供する必要性が垣間見えた。

2. プロジェクトの目的

本プロジェクトの主たる目的は、地域交流会イベントを通して、参加学生自身が、障がいを持たれている方との関係性の構築に関するコミュニケーションスキルの重要性を再認知した上で、多面的コ

ミュニケーション場面を経験することである。

3. 実施内容

藍野大学地域連携プロジェクトの承認（承認番号：20-T23003）を得て、2023 年 8 月 24 日（夏期休業期間）および 2024 年 3 月 7 日（春期休業期間）、計 2 日間、両日ともに午前中に開催した。藍野大学医療保健学部（看護・理学療法・作業療法・臨床工学学科）に在籍する全学生（4 年生以外）に対し、学内情報共有ツールを用いて広報を行い、参加希望者を募集した。学生自身のコミュニケーションスキルアップを達成するために、臨床心理士による「コミュニケーションの本質」に関する事前講義を参加学生に実施した。その後、地域交流会イベントを開催した。参加学生らは、「当事者の誘導および製作物の作成に関わる支援（準備・操作など）」を経験した。参加学生に対し、地域交流会イベント終了後、Google Forms を用いてアンケート調査を実施し、今後の展望について検討した。

4. 結果・今後の展望

本年度、計 2 回の地域交流会に参加した学生は、計 13 名（内訳；女性 7 名、男性 4 名、未回答 2 名）であった。本年度、社会福祉法人より地域交流会イベントに参加いただいた当事者は計 14 名、職員は計 6 名であった。「本イベントの満足度」は、満足 11 名、やや満足 2 名であり、「次回もこのようなイベントがあれば参加したいか」に対して、11 名が参加したいと回答した。「サポートティブなコミュニケーション方法に関する事前講義の内容」について、「大変わかりやすかった（N=9, 69.2%）」、「わかりやすかった（N=4, 30.8%）」と回答し、「事前講義で得た知識・技術を地域交流会イベント内で生かすことができたか」について、「大変活かすことができ

表1 地域交流会イベント参加学生に対するイベント終了後のアンケート調査結果

問	回答
問 参加した 1 主な理由	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベントを通して様々な経験をしたい ・ 就職活動に活かしたいと思った ・ 障がいを持った方とのコミュニケーションの取り方のお話が聞けること ・ manaba のコンテンツで知り興味を持った, 夏休み期間中であり時間があつたから ・ 本イベントに興味があり, 学校での開催だったため ・ 障がいのある方との関わり方について学べる良い機会であると思ったため
問 参加した 2 主な感想	<ul style="list-style-type: none"> ・ サポートする側だと思っていたが私自身がとても楽しかった ・ 緊張したが, とてもフレンドリーに話して下さったので, 楽しかった ・ 楽しくボランティアとして活動でき, とても有意義な時間を過ごせた ・ コミュニケーションを取ることに苦戦した ・ 想像以上に自分も楽しめ, 利用者の方々にも楽しんでいただけたと思う ・ 相手に自分から関わる意識を持つことで良い経験ができた ・ 緊張したが, 作業を進めるうちに距離感が掴め, 楽しく交流することができた ・ 障がいのある方でも時間をかけて関わることで, 楽しそうな表情が見れた ・ たくさん会話していただけたり, 様々な発見があり楽しかった ・ 普段しない貴重な体験ができて嬉しかった, 多くの学びを得ることができた
問 3 イベント参加前後で自身の変化したと思う点	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント終了時には, コミュニケーションがかなり取れた ・ コミュニケーションは, 聴く方がとても大切だと改めて実感した ・ どのような環境で生活するかが豊かな人生に重要な要素だと気づいた ・ 何でもやってあげるという意識ではなく, 相手の意思を最優先にすること ・ 全て支援するのではなく, 相手が自分でできる事はしてもらう事が大切である ・ 見守ること, 相槌だけでも相手に安心感を与えられるということを実感した ・ 個々の苦手とするものを見つけ, 必要な支援を考えることが大切だということ ・ 目の前の人のことを知ろうとすることが何よりも大切だと感じた ・ 会話の仕方やコミュニケーションの取り方が変化したとを感じる ・ 相手の意見を焦らずに待つことも大切だと学ぶことができた

た (N=7, 53.8%)」, 「活かすことができた (N=5, 38.5%)」, 「わからない (N=1, 7.7%)」と回答した。

地域交流会イベント参加学生に対するイベント終了後のアンケート調査結果については, 表1に示すとおりである。参加学生の大半が, 参加目的・目標を明確に持ち, 意欲的に本イベントに参加していた。参加学生の主な感想の内, 「楽しい」との記述を多く認める一方, 「有意義」および「関わる」など, 今回のイベントを通し, 「他者との関係性の構築」, 「経験に対する価値」を見出している学生も散見された。自身の変化点について, 「コミュニケーション」, 「相手」, 「支援」, 「相槌」, 「見守る」など, 具体的な「サポータータイプなコミュニケーション」手法に関する習得を実感する学生も散見された。「今後, 自身の社会性/専門性に活かすことはできそうか」について, 「かなりそう思う (社会性: N=7, 53.8%) / (専門性: N=7, 53.8%)」, 「そう思う (社会性: N=4, 30.8%) / (専門性: N=6, 46.2%)」, 「わからない (社会性: N=2, 15.4%) / (専門性: N=0, 0.0%)」と回答した。

以上より, 「サポータータイプなコミュニケーション」の一端を再認知し, 地域交流会イベントにて多面的

コミュニケーションを経験したことにより, 自身の内省的な変化を具体的に見出し, 高い満足度を得ることができたと考える。今後も「就労支援 cafe “3s cafe (さんず・かふえ)”」は, 持続可能性を重視し, 地域および本学 (個々の学生) の課題を解決し, 社会的要望に応答できる医療専門職の醸成に向けた取り組みを推進していきたい。

5. 謝辞

地域交流会イベントにご協力いただいた「社会福祉法人: 花の会」, 「社会福祉法人: わかくさ福祉会」の皆様, ならびに, 藍野大学医療保健学部在籍し, 参加いただいた学生の皆様および関係各部署教職員の皆様に対し, 深謝いたします。

参考文献

- [1] 加藤博史: 福祉とは何だろう, 159, 東京(2011)
- [2] 松井亮輔: 福祉的就労の推移, 現状と今後のあり方について, 職業リハビリテーション, 16, 18-21(2003)
- [3] 中野重行: 医療コミュニケーション学習と模擬患者 (SP), Japanese Pharmacology & Therapeutics, 38, 12, 1077-1088(2010)